

書評

坪井秀人 著

『性が語る 二〇世紀日本文学の性と身体』

飯田 祐子

『性が語る』という表題は、「性を語る主体」を問題化するために選ばれたという。本書に収められた論考はこれまでも個別に読んでいたのだが、こうしてまとめて通読してみると、二十年間途切れること無く「性」についての思考が重ねられていたのだということに、静かで深い感銘を覚えた。『声の祝祭——日本近代詩と戦争』・『感覚の近代——声・身体・表象』に続く大著であるが、それらと本書が異なるのは書き手の身体性が感じられるということだ。本書末尾では、「自己責任論の陥穽をいかにして回避し、それを批判する思考をいかに導くか」という課題に私なりに答えるための戦略」(657―658頁)と書かれているが、本書の厚みは、「性」の問題が「自己責任論」に対抗するための「個人的な」問題の一つにとどまらない重みで扱われてきたことを示しているだろうと思う。

本書を書きながら、書き手・坪井秀人は「個人的なこ

とは政治的なことである」というフレーズを「何度もつぶやいて」いたという(657頁)。「個人的なことは政治的なことである」というテーゼは、「個人的であること」と「政治的であるということ」の乖離を、本意であろうがなかるうがかみしめざるを得ず、その乖離の苦しみをかみしめ続けながら他者に向けて語ろうとする場所で生まれたものである。個人的なことが普遍に繋がると信じうるような呑気で傲岸なマジョリテイの思考からは、決して生まれ得ない。政治的であるということは普遍的であるということとは、全く違う。政治的な場では、自と他が分かたれている。他者が存在しているということをかみしめざるを得ないのは、多くの場合マイノリティの側である。マイノリティが身体にため込んできた怒りや悲しみや喜びや快楽は、声となることを許されずに堆積していくのが常であるが、その禁を破ろうというとき、彼／彼女を黙らせる力学を粉砕するために呪文のように

言挙げされるのが「個人的なことは政治的なことである」という言葉である。言葉が易々と現実化し得るかのよう
に語る者は、このテーゼの主体とはいえない。個人的な
ことは政治的なことであるはずなのだという物言い、言
挙げとして、そうではないところから発せられる言葉な
のである。本書が撃とうとするのは、ジェンダー体制が
「市場原理主義の多極化とグローバル化の中で」「不透明
な形で不可視化」されてしまう現在である（11頁）。か
つても今も、性はアイデンティティの深奥に組み込まれ
ている。それゆえ性のあり様を見つめることは「〈私と
は何ものなのか〉という問い」（7頁）に誠実に向かう
ことに繋がるのである。

語り手のジェンダーを問題化する本書であるから、書
き手である坪井のジェンダーを確認することは本書の意
図にかなっていると思う。坪井はジェンダーでいえばマ
ジョリティである〈男〉に属している。その意味の自覚
とともに「個人的であることは政治的である」とつぶや
く坪井の姿勢は、〈男〉は（たしかに）一枚岩ではない
ということを示している。マジョリティであることの徹
底した自覚、その居心地の悪さや不自由さが、本書にお
けるそれぞれの論考に滲んでいる。本書の六つの部立て
は論の対象を概ねクロニクルに並べたものと思われるが、

ここでは部をまたいで大きく三つに分け、全体を見渡し
てみたい。二十年という時間をかけて坪井が言語化しよ
うとしてきたことには、三つのまとまりがあると思われ
る。

一つ目として、〈声〉をめぐる論考群がある。〈声〉
は、あらためて言うまでもなく坪井が強くこだわってき
たテーマである。『声の祝祭』や『感覚の近代』では、声
が危険な力を帯びていることが分析されてきた。言葉と
身体との繋ぎ目にある〈声〉は、イデオロギーの浸透にお
いて大きな役割を果たす。本来多様であるはずの〈声〉
が制御され整理されることで人々の共振を発生させる装
置として機能してきたことを、様々な局面において抉り
出してきた坪井であるが、性を論ずる本書では〈声〉も
ジェンダー化している。注目されているのは、〈女の声〉
である。第1部では第一章「電話する女たち」と第二章
「ヒステリーの時代」において、男に欲望される〈女の
声〉が問題化されている。第一章では電話する女と交換
手、「声に特化された女性性」の有り様が描かれ、第二
章ではフェミニズム批評が女性作家を論じて抽出した
〈ヒロイン／狂女〉という二項対立が、男たちの欲望の
なかでは〈ヒロイン＝狂女〉と重ねられてしまうこと、
〈狂女の声〉はそのようにして抑圧されていることが指

摘されている。たとえば『或る女』において、「語り手は葉子を語るのではなく、見る、そして聴く」のであると穿つ(80頁)。谷崎論が集められた第IV部では、第三章「〈彼女の物語〉をさがして」が〈女の声〉の抑圧を論じる。『少将滋幹の母』は、〈内的不定焦点化〉による多声法によって男たちのさまざまな〈声〉を集めていくにもかかわらず、母Ⅱ女の〈声〉だけは封印するテクストなのである。

この問題系が最も充実して展開されているのは、第V部「女の声を盗む」にまとめられた太宰論である。第一章「語る女たちに耳傾けて」では「語り手の複数のテクストのあわいに浮かび上ってくるのは、〈太宰治〉という署名を持った語り手の強力な幻像なのだ」(358頁)と総括したうえで、「女性の他者化Ⅱ属領化の陥穽から免れているとは言いがたい」(362頁)と厳しく断じている。太宰の語りが、はっきりと意識的に実践された「女装」であるということに、全く異論はない。第二章「女の声を盗む」においては、男語りとの差異について考察され、「太宰の男語りによる小説テクストの場合、構成的・散文的な志向が強く、反省的な自意識あるいは自虐意識を基調に置くのに対し、女語りの小説の語りには意識の外に出ていく、あるいは意識化の作業そのものを排除する、

といった意味合いが持たされている」。「男の語りは意味内容に基軸を置くのに対し、女の語りの場合は意味内容を消す、語りという行為じたいの価値が評価の対象になってくるように思われる」(372頁)と指摘されている。女語りをした太宰であるからこそ、そうでない語りが男語りとして分節されうるといえるだろう。「作家の太宰治は自分自身以外の〈性〉によって語ることで自由になる。うとする、そのような自由な声 (Stimme) の趣 (Stimmung) を自分の性ではない女の声の語り、女語りによって得ようとしたのであろう」(383頁)という結論はその意味で説得的である。太宰の多重化する自己懷疑は、特権化された階層に属する男性であることと分かちがたく絡みあっていると思われる。その居心地の悪さと狭苦しさに、ねじれた矜持が混じり合って男語りは生み出されている。論理からはほど遠くとも異様に鋭い女装語りは、男語りと組み合わされて、太宰という語り手の男性性を浮かび上がらせるのである。

こうした〈女の声〉を抑圧し他者化Ⅱ属領化する男の欲望が読み解かれる一方で、〈女の声〉そのものにも目が向けられている。第III部第一章「みずからの声を翻訳する」では、知里幸恵『アイヌ神謡集』が取り上げられている。もっとも丁寧に読み込まれそして聴かれようと

しているのは、「彼女の中に蘇ってきている」「文字化しきれない声というもの」(204頁)である。『アイヌ神謡集』における自己翻訳の作業が、〈西欧語／アイヌ語／日本語〉というトライリンガルな三角形の中でなされているという指摘とともに、同化への「抵抗」の痕跡として、知里幸恵の内側に再生する声が聴きとられている。そして、第七部「現代詩と女の身体——伊藤比呂美」は、〈女の声〉そのものが響き渡った論ということができらるう。〈女の声〉のうねりに巻き込まれることで書かれ得たと思われる第七部の分厚い論考については、三つ目のかたまりとして後述したいと思う。

さて、二つ目としてまとめてみたいのは、〈男〉そのものを見つめた論考である。第一の問題系でも〈男〉の欲望が論じられているが、〈女の声〉をその対象に置くため具体的な様相は概ね「抑圧」のヴァリエーションとして示されているとあってよいだろう。それに対し、第二の問題系では、「抑圧」とは異質な、様々な〈男〉という性の症状(という語は本書では選ばれていないが)が洗い出されているとあってよいだろう。たとえば第二部「日本という身体——ハーンと萩原朝太郎」。第一章「浦島のゆくえ」では、「死(前近代の死者の時間)と女性のペアのイメージ」(122頁)で日本を語るハーンを「召

喚」する朝太郎を論じて、「〈虚無〉や〈漂泊〉のモチーフが、国粹の時代の本質主義によって容易に染められてしまうあやうさを孕んでいた」(145頁)という。第二章では、室生・山村・大手といった男性作家・詩人たちの差異を見つめつつ、「萩原の表現するセクシュアリティは、対象性、いわゆる他者の他者性が著しく損なわれているために、本質的にエロスの不毛(不能)性を招いていると言わざるを得ない」(180頁)と指摘している。第三部第二章「怠惰とコキュ——李箱のモダニズム」は、コキュとして書くことが西欧中心主義に結ばれゆく武林夢想庵や金子光晴を参照しながら、「怠惰」で「不安」と「空白」を抱え込んだ李箱の「コキュ」の有り様から、李箱が紛れもない植民地の作家であることを明らかにする。第四部第一章「性の非対称」は、河野多恵子『みいら採り猟奇譚』と富岡多恵子「遠い空」などに挟んで、吉行淳之介『暗室』が取り上げられている。女性作家の分析にも共感を覚えたが、書き手・坪井の身体性をより強く感じさせるのは『暗室』論である。男性エゴを断罪する『男流文学論』のような立場に対して、「理解不能性の状況を克明に描き出し、性と生の危機を自覚する年齢に達した男が男性性のありかを求めながら惨敗していく過程をある種の誠実さをもって探求したテクスト」と

読み解く(435頁)。

ことに興味深かったのは第IV部「性的身体としての語り——谷崎潤一郎」である。ここで繰り返し抽出されるのは、谷崎テクストにおける「断種」のモチーフである。第一章「身体創造とユートピア」では「〈人の親〉たること、〈作品の作者〉たることは、彼に自己疎外のような状況をもたらす」(253頁)とした上で、「金色の死」に「次なる世代への連続性をも葬り去る思想」(258頁)を読み、「創造」に「断種を目的とした純血主義の物語」(267頁)を読み込む。第四章「男もすなる……」では、『鍵』について「テクストは夫の欲望の逸脱を妻のそれが抜け出ていく過程を描き、かつ実質的な〈去勢〉によって男根的欲望の言説を断種する」(342頁)と指摘し、第五章「子を産まぬ母」では『夢の浮橋』を取り上げて、「テクスト全体に一貫する出産に対する嫌悪あるいは恐怖の感情」(352頁)を読み解く。第二章『痴人の愛』の「私」では、「テクナー」の作家谷崎の一策として語り手と讓治の距離が分析されているが、他の論考と合わせれば、『読者が語り手との契約(共犯関係)を裏切り(275頁)、ついには「テクストが、〈私〉を追放する」(290頁)という指摘も、本来テクストを生み出す親||語り手がテクスト||子に追放されるという水準の転倒、継承の不具合

として、「断種」に通じる読みといえそうだ。坪井は、谷崎の「母恋い」を「出産嫌悪」に読みかえ、「去勢」「断種」に変異させていく。谷崎のマチズモの過剰さが、単なる女性嫌悪や女性の抑圧を突き抜けて、ある種の弱さ脆さへと引き寄せられているのである。こうした〈男〉を問題化した分析は、ヘテロ男性の語り手の限界を見出すものともいえるだろうが、〈政治的正しさ〉に阿るものではなくない。「序章」には「性の政治性を問題化することをフェミニズム批評と共有しながら、二十世紀日本の文学テクストがとらえる性の様態がきわめて複雑多様で、種々の葛藤を内包したものであることを、丁寧に描き出しておく必要がある」(16頁)と述べられているが、フェミニズム批評が敵視することで肥大化させてしまった〈男〉の姿を等身大に姿ませるようで、非常に刺激的であった。朔太郎に「不能」、李箱に「コキユ」、吉行には「虚無」、谷崎には「断種」。本書に揃えられた〈男〉たちは、産む性である〈女〉を怖れ嫌悪しながら、生き物として無力な姿を晒している。

最後に、第三のかたまりとして、第VII部の伊藤比呂美論がある。執筆時期の最も古い論考(一九八九)と最も新しい書き下ろしによって構成されており、書き手・坪井の時間に戻せば、第一・第二にまとめた論考は第三の

伊藤比呂美論に挟み込まれているともいえるだろう。伊藤比呂美論は本書の始発の地点を示すと同時に現在を表している。坪井が描き出した〈男〉たちの像は、伊藤比呂美という一人の〈女〉によって輪郭を与えられているといっている過ぎであろうか。ともあれ、そのような強度を帯びた論考群である。

第一章「伊藤比呂美という詩人」は、伊藤比呂美の変容の概説。その後、順を追って作品の分析がなされていく。第二章「伊藤比呂美初期詩論」では伊藤比呂美の創作意識が「従来のような〈書く〉（刻む≡定着させる）」という表現の発想（491頁）といかに異なっているかが、次のように説明される。「言葉は板や紙に文字を刻み、塗り込んで終わるのではなく、湿りを帯び痛みを発する皮膚のように、言葉を投げかけられた場所で震え、揺れうごき、そこから声が言葉が迸り出す——」（492頁）。伊藤比呂美という〈女の声〉は強く、それに共鳴するかのような本書の言葉も熱い。「穢れた力」を帯びた〈声〉と息づかいと同時に読み取られているのは、「身体を拒否した文体」と説明される散文スタイルの「無機質」さである。両者のダイナミズムが、続く第三章でも『テリトリー論2』に読みとられていく。ここでは、詩にとつて「危機」にもなりうる散文スタイルが、引用とミニマ

リズムという方法に展開していくことが指摘される。さらに『テリトリー論1』を論じる第四章で「父」や「写真との格闘と対話」といった要素を新たに論じ加えつつ、「伊藤の詩の魅力」がまとめられる。それは「アニミズム的で宇宙論的な世界が、抒情的なぬめりを帯びるのを排し、無機質なまでに散文的なスタイルで、単位となる型をミニマルに反復しずらす手法によって表象されている点にある」（566頁）。これらの「言葉に対する問題意識」に通底しているのは、「女あるいは母固有の価値の回復」（568頁）である。坪井の指摘に添いつつ確認しておきたいのは、伊藤比呂美における母の価値の回復は、産む母に特化されているわけではないということである。「産む」だけではない、「子べらし」「子殺し」もする母たちである。その点の念押しを含んで、伊藤比呂美の作品は「話者（《わたし》）の主体を強調するのではなく、その主体をしてそれを取り巻く超個人的な欲望を情念を受容せしめるという形式を取って、それは他者の言説からの〈引用〉という方法の導入と切り離せない」（576頁）という指摘に、強く同意したい。伊藤比呂美は、たしかに〈わたし〉としての欲望をため込んだ近代的な母の像をぶち壊していると思うからだ。本書も指摘するフェミニズムの二つのあり様、〈産む〉性であることへの反発

にも、逆にそこから出発することにも、ともに〈わたし〉の匂いが満ちている。母と子の閉じた世界に離反するのでも没入するのでもなく、(本書の言葉でいえば)「種」(488頁)の滔滔たる流れに〈わたし〉を潰し込むことで、母と子は結ばれ得るのだと思う。「子殺し」は一見すると継承の不具合として第二の問題系の〈男〉たちの断種と近いようにみえるが、両者は全く異質なものだ。〈男〉たちの断種は、彼らをどこにも何にも結ばない。自己複製はどのように繰り返されても、「不毛」で「虚無」である。坪井は、伊藤比呂美が〈詩作〈オナー〉(584頁)をずらし続けて「《自由だ》」という言葉に辿りつく運動をうつつとっている(581―585頁)。「子殺し」は反復されずられ、母と子を結んでかつ「自由」である。伊藤比呂美における「引用」は「モラルからの自由さ」を「変容する言葉と論理の自由さと一体のものとするところまで辿り着いたと言える」(586頁)とまとめられている。

第五章では『デリトリー論』以後、現在までが論じられている。浮かんでくるのは、〈日本語〉をこわし〈家庭〉をこわし、親と子の葛藤と対話の関係性をこわし、「自分自身をも解体し消去(auslöschan/erase)してしまいたい」(594頁)という欲望であるという。『わたしはあ

んじゅひめ子である』では、「母と子との円環的な流れが断ち切られている」(602頁)。そして『とげ抜き 新集 鳴地藏縁起』と『読み解き「般若心経」』という現在。

引用は「他者の声呼び寄せ、それと交じわる、言うなれば巫女が行う〈口寄せ〉を思わせるような方法意識」となっている。そうでありながら、「その〈声〉を通して想起される他者の経験をよみがえらせるには、あまりに《わたし》の語る経験のにおいが生々しい」(608頁)。

《わたし》の経験のにおいが生々しいとはいっても、この《わたし》は《わたし》であることを欲望するものではない。《わたし》を探して湧き出てきた言葉ではないからだ。それは「死に対する心と身体の準備」(612頁)である。老いも死も《わたし》をほどこいていく。伊藤比呂美の言葉にひたすらに感応してゆこうとする坪井も、研究の文体をほどこき、分析者としての〈わたし〉を脱けていくようである。「数々の心理的なタブーを打ち破ってきた伊藤比呂美が、おそらく初めて人々の抱くタブーの深層にわがこととして肌を接し、それをおそれ、くるしみ、そして祈らんばかりになる、そのような膝を詰めた感情を尊いものとして表出しようとしているのである」(612頁)。自己複製の隘路から脱け出た〈男〉(であると同時にそれだけではないもの)の身体が書き手の場に現

れている。

本書は、フェミニズムと併走してきた〈男〉による「個人的なことは政治的である」というテーゼの真摯な実践である。「〈私とは何ものなのか〉という問い」は、〈私〉の欲望を突き抜けて〈私〉の解体へと向かっている。丁寧な細やかに〈男〉たちの言葉に分け入り、フェミニズム批評とは違う語法で描き出された〈男〉の姿は、新鮮であった。〈女の声〉に向けられてきた〈男〉の欲望を脱け出て、〈女の声〉に感応していく書き手のあり様には、感銘を覚えた。「個人的なこと」を「政治的なこと」として問題化するという行為が、個人と政治を分断する体制をゆさぶり壊すことを、本書とともに願いたいと思う。

二〇一二年二月二〇日刊、名古屋大学出版会、A5版、

六六六頁、六、〇〇〇円＋税

(いいだ・ゆうこ／神戸女学院大学)